

『礼拝の再建』 ヨハネの福音書 2章 13~25 節

1. 神殿は礼拝する場所

本日の箇所は、他の福音書では受難週の出来事とされる宮きよめが記されています。イエス様は生涯に二度、宮きよめをされたのでしょう。13 節に「さて、ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。」とありますが、ユダヤ人の最大の祭である「過越の祭り」に、イエス様がエルサレムに上った時のことが語られています。

「過越の祭り」とは、エジプト脱出を記念し、神の大能と救済の御業を思い起こすものです。「過越の祭り」は、出エジプト記に記されたイスラエルの民がエジプトの奴隸状態から解放される出来事に由来しています。神は、最後の災厄としてエジプト中のすべての初子を奪うと予告しました。ですが、イスラエルの家においては、羊の血を戸口に塗ったため、その家は災厄から守られました。ユダヤ暦の年の始まりである第1の月（ニサン）の、14 日目に行われます。新年を祝い、イスラエル国家の誕生を記念する祭りです。「過越の祭り」では「過越しの食事」を行います。イエス様と弟子たちによる「最後の晚餐」は、この過越しの食事です。また、遊牧生活に由来する「子羊の奉獻」と、農耕生活に由来する「種入れぬパンの祭」とを結合しています。現在では、「過越の祭り」が祝われる時期に、キリスト教会ではイースター（復活祭）が祝われます。

さて「過越の祭り」にエルサレムに上ったイエス様は、その祭の中心である「神殿」に行かれました。14 節に「そして、宮の中で、牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを見て」とあります。「神殿」の境内で売られていた牛や羊や鳩は、「神殿」の祭儀つまり礼拝において犠牲としてささげるためのものです。神にささげる犠牲の動物は、傷のないものとして祭司に認められたものでなければなりませんでした。それゆえに、遠くから巡礼に来る人のために、祭司の認定済みの動物が境内で売られていたのです。人々はそれを買って神に犠牲をささげて礼拝をしたのです。両替をしている者というのも、神に献げることができたのは特別なお金だけだったので、普通のお金からその献金用のお金への両替をしていたのです。つまりこれらの商売はみな、「神殿」の祭儀、礼拝のためになされていたことです。

しかしイエス様はその光景を見て、15~16 節で「細縄でむちを作つて、羊も牛もみな宮から追い出し、両替人の金を散らして、その台を倒し、鳩を売っている者たちに言われた。「それをここから持つて行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」」と、イエス様は激しく怒られたのです。怒りの感情をこれほど剥き出しにし、しかも暴力的に振る舞っておられるイエス様の姿が語られているのは、この場面だけですから、驚いてしまいます。イエス様のこの激しい怒りの中心にあるのは、「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」という思いです。「ひとり子である神」であるイエス様は、神を「わたしの父」と呼ぶことのできる唯一の方です。そのイエス様にとって「神殿」は「わたしの父の家」なのです。これは、神が「神殿」に住んでおられるということではありません。ソロモン王は、列王記第一 8 章 27 節で「それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」ということを、最初に「神殿」を造った時に語っています。「神殿」というのは、神が住んでおられる所ではなくて、民がそこに集つて礼拝をする、その礼拝に神がご臨在下さって、民と出会い、交わりを持って下さる、そのための場所です。つまり「神殿」が「神の家」と言われているのは、そこが礼拝の場所だからです。その「神殿」が、たとえ礼拝の便宜をはかることが目的だったとしても、人間の商売の家、つまり金儲けをする場とされていることに、イエス様は激しく怒ったのです。

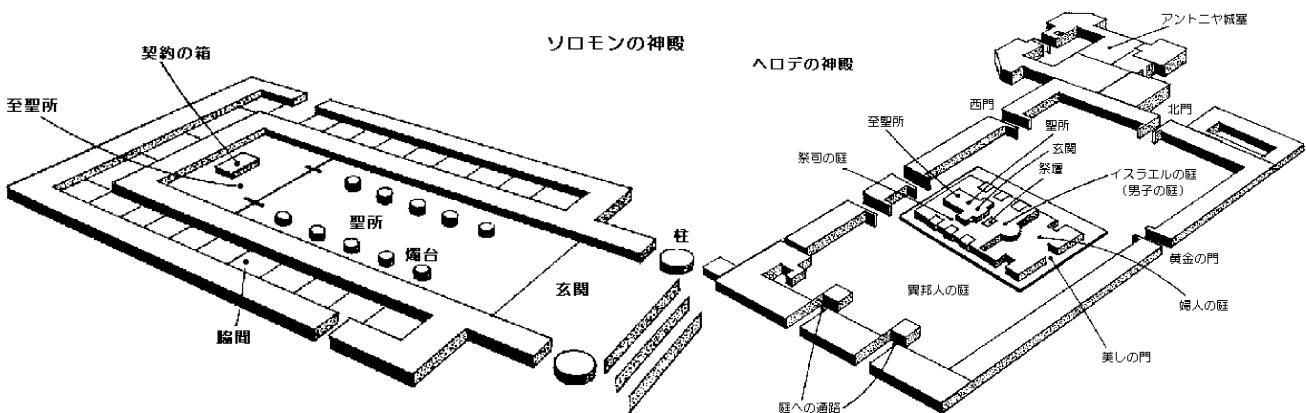
2. 礼拝の再建

17 節には、このイエス様の激しい怒りの姿を見た弟子たちが、「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」と書いてあるのを思い起した。」とあります。弟子たちはイエス様の姿に、旧約聖書の言葉の実現を見たのです。それは詩篇 69 篇 9 節では「それはあなたの家を思う熱心が私を食い尽くしあなたを嘲る者たちの嘲りが私に降りかかったか

らです。」となっています。ここに語られているのは、神の「**神殿**」を思う熱情に満たされているがゆえに、人々の嘲りが自分にふりかかっている、ということです。こういうことがまさにイエス様に起っている、と弟子たちは思ったのです。

18節でユダヤ人たちは、イエス様に「**こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。**」と言ったのです。これはイエス様に対する激しい反感、敵対の言葉です。

それに対してイエス様は、9節「**この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。**」と言いました。それを聞いたユダヤ人たちは驚いて20節「**この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。**」と言いました。この時のエルサレムの「**神殿**」について、「用語解説」では「紀元前20年ごろヘロデ大王は大規模な修理拡張工事を始めた。イエスの時代には、周囲に回廊を巡らした広い境内と、白い大理石の美しい本殿を持つ、りっぱな建造物であった」とあります。「**この神殿は建てるのに四十六年かかった。**」と言っているのは、このヘロデ大王による修理拡張工事のことです。この工事によって、この時のエルサレム「**神殿**」は、バビロン捕囚から帰った人々によって再建された質素な「**神殿**」とは比べものにならない立派な、壯麗なものとなっていました。その「**神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる**」と言ったイエス様に、人々は驚いたと言うよりもむしろあきれかえったのです。



しかしイエス様のこの言葉は、決して大言壯語ではありません。イエス様が「**この神殿を壊してみなさい**」と言っている「**神殿**」という言葉は、本来は、「**神殿**」の中心であるいわゆる「**至聖所**」を意味する言葉です。その「**至聖所**」こそ、神が臨んで下さる場であり、そこには年に一度大祭司だけが入ることができ、イスラエルの民全体の罪の贖いの儀式をしたのです。この「**至聖所**」を囲むように、**礼拝**の場が何段階かに分けて築かれていたのが「**神殿**」でした。そこで**礼拝**をしていたユダヤ人たちは、「**至聖所**」において大祭司が年に一度神の御前に出る、そのまことの**礼拝**に思いをはせつつ、神が臨んで下さるわけではないその周囲で**礼拝**をしていたのです。ヘロデ大王はその**礼拝**の場をさらに拡張して周囲に回廊を巡らし、異邦人も入れる広い庭を造りました。それがここで「**宮の中**（神殿の境内）」と言われている所です。しかし、それらは「**神殿**」の本質的な部分ではありません。「**神殿**」の中心は、神がそこに臨んで下さり、現れて下さる「**至聖所**」なのです。イエス様は「**神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる**」と言ったのです。それは、四十六年かけてヘロデが拡張した回廊や大理石の本殿を三日で建て直すということではありません。「**神殿**」の中心にある神のご臨在の場である「**至聖所**」を、つまり**礼拝**の中心を建て直す、ということであり、神の民のまことの**礼拝**を再建する、ということなのです。

「**この神殿を壊してみなさい**」という挑発的な言葉も、こんな「**神殿**」は壊れてしまえばいい、ということではありません。イエス様はユダヤ人たちに、あなたがたは、罪人が神による赦しの恵みによって生ける神の御前に出て、神との交わりに生きるという**礼拝**の中心、本質を見失って、人間の願いや欲望をかなえるために神を利用するような**礼拝**を行い、またそれを人間のビジネスの場としてしまっている、そのようにしてあなたがた自身がまことの**礼拝**を破壊している、と言っているのです。そして「**三日でそれをよみがえらせる**」というのは、「あなたがたが壊しているまことの**礼拝**を、わたしは三日で建て直すのだ」ということです。

ここでイエス様が語っていることは、ガリラヤのカナにおける最初のしるしにおいて示されていたのと同じことだと言えます。あのしるしにおいては、ユダヤ人の清めのための水がめに満たされた水が、イエス様が共に席に着いておられる祝宴のための喜びのぶどう酒に変えられました。この奇跡は、イエス様が来られたことによって神と人間との関係が決定的に変わったことを示しています。神と人間との関係が変わることは、礼拝が変わるということです。それまでは、罪人である人間は自らを清めることなしには神の御前に出て礼拝をすることができなかったのです。その清めはそう簡単にできることではありませんから、年に一度、大祭司だけしか、まことの礼拝をすることができなかったのです。つまり人々はまことの礼拝に連なることができなかったのです。しかしイエス様は、まことの礼拝を打ち立て、私たちをそこに連なせて下さったのです。私たちの誰もが、罪を赦された喜びをもって神の御前に出て、生ける神との良い交わりに生きていく、そういうまことの礼拝をイエス様が実現し、そのまことの礼拝の場であるまことの「神殿」を私たちのために築いて下さったのです。

3. 教会の礼拝において

そのまことの礼拝の再建を「三日で」なさるとイエス様は宣言なさいました。それは、イエス様が十字架にかかって死に、三日目に復活なさることを指しています。イエス様の十字架の死と復活によって、新しい、まことの礼拝が確立し、その礼拝の場であるまことの「神殿」が築かれ、私たちに与えられたのです。イエス様の十字架の死はイエス様が私たちの全ての罪を背負って、それを帳消しにするために引き受けて下さったものでした。私たちはそれによって、罪を赦され、きよめられ、義とされて、生ける神の御前に出て礼拝をすることができるようになったのです。私たちはもはや犠牲の動物をささげることも、水によって身を清めることもなしに、神の御前に出ることができます。

ローマ書 12 章 1 節に「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」とあります。神へのささげものも、特別にきよい何かを準備する必要はないのであって、罪と汚れに満ちている私たち自身を、神にささげることができます。イエス様が十字架にかかって死んで下さったことによって、私たちはそのようなまことの礼拝をささげができるようになったのです。

そして、「三日で」は復活を見つめているのです。イエス様は復活によってこそ、新しいまことの「神殿」を打ち立てて下さったのです。21 節には「しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。」とあります。イエス様の復活によって、イエス様のからだである新しいまことの「神殿」が築かれた、それは教会のことです。教会は主イエス・キリストの体である、と聖書は語っています。教会は、私たちの罪の赦しのために十字架にかかって死んで下さったイエス様が、復活して永遠の命を生きておられる、そのイエス様のもとに集められ、その救いにあずかり、イエス様と結び合わされた群れです。イエス様の十字架の死と復活によって、そしてさらには聖霊の働きによって、地上にキリストのからだである教会が築かれたのです。このキリストのからだである教会こそが、イエス様が三日で建て直すと宣言されたまことの「神殿」、まことの礼拝の場なのです。

22 節には、「それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。」とあります。イエス様が三日で「神殿」を建て直すと言ったのが、十字架の死と復活、そして教会の誕生による救いを指していたのだということを弟子たちが信じることができたのは、イエス様の十字架と復活を目撃し、そこに築かれた教会に連なって生きることでした。私たちも今、教会の礼拝へと招かれています。教会における礼拝においてこそ私たちは、イエス様の十字架による罪の赦しを、またイエス様の復活による永遠の命の約束を、体験し、信じて新しく生き始めることができます。

4. 全てをご存じの主

この 23 節に「過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。」とありますが、イエス様のなさったしるしによって、イエス様を救い主と信じる人々が増

し加えられていきました。イエス様の活動が順調に前進しているように感じられます。ところが24節前半には、そういう感想をひっくり返すようなことが語られています。「しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかつた。」と言われているのです。

イエス様が人々を信用なさらなかつたのは、なぜでしょうか。24節後半～25節に「すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかつたからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。」と語られています。イエス様は、全ての人のことをよく知っています。しかも表に表れている、目に見えていることだけでなく、心の中にあることまで全て、お見通しだったのです。私たちは、人のことを、表に表れていること、目に見えていることによって判断します。勿論単に外見だけで判断するわけではありません。その人と関わり、話をすることによって感じられるその人の内面も推し量りながらある評価や判断をするのです。でも私たちは、その人の心の中をはっきり見ることはできません。心の中に隠されている思いは分からぬのです。しかしイエス様は、人間の心の中に何があるのか、人には見せていないどんな思いがあるのかを、全て知っておられるのです。

またここには、イエス様は「人についてだれの証言も必要とされなかつた」と語られています。私たちは、人のことを理解し判断する際に、自分が直接経験したことによってだけでなく、他の人から聞いたことによって判断することがあります。つまり誰かがその人について「証言」をしたことに基づいてその人のことを判断することが多いのです。その「証言」は、しばしば単なる噂話だったりもします。「あの人こういう人なのだ」という話によって、その人についての自分のイメージ、印象が定まってしまうことがあります。そのために、私たちの人にに対する判断はしばしば誤りを犯します。「あの人こうなのだ」という形で語られることは大抵悪口です。悪口に乗せられて悪い印象を人に対して持ってしまう、しかし実際に会ってみたらそうではなかつた、ということがしばしば起るのです。

イエス様は「人についてだれの証言も必要とされなかつた」というのは、イエス様においてはそういうことはなかつたということです。イエス様は、「あの人こうなのだ」という話によって人のことを判断することはなさらないのです。人づての話に頼る必要はなく、ご自身が、全ての人のことを知っておられ、しかもその人の心の中にあることまでも、よく知っておられたのです。イエス様は、私たちが他の人を知り、判断するのと同じ仕方で人間のことを知るのではなくて、ご自身の神としての力によって、人の心の中にあることまでも知ることができる方です。

サムエル記第一16章7節に「【主】はサムエルに言われた。「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」とあります。イエス様は、私たち一人ひとりの心の中に何があるのかをよく知っておられるのです。そのイエス様の目には、私たちは自分の本当の姿、本当の思いを隠すことは全くできないのです。

ヨハネの福音書は、私たちの深い罪と弱さをよくよく知った上で、その私たちのための救い主としてこの世に来て下さったイエス様を示してくれています。イエス様が弟子たちを、教会を、どれほど信頼して下さっているか、それはヨハネの福音書20章21～23節で「イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」という御言葉に示されています。イエス様の十字架と復活によって実現した罪の赦しの恵み、救いを、復活した主は私たちに委ね、それが人々の間で実現していくために私たちを、教会を用いて下さるのです。復活したイエス様は私たちをこのように信用し、信頼して、御業のために用いて下さるのです。十字架の死と復活の前と後では、私たちに対する信頼、信用が大きく変っているのです。それは私たちが信頼されるに足る力のある者になったということではなくて、イエス様が十字架と復活によって成し遂げて下さった救いが私たちに与えられた、ということです。そのことは聖霊の働きによって実現します。イエス様が私たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい」と言って下さり、聖霊に満たされて新しく生きる者として下さるのです。